

# 人形姫

山本幸久

## 第十一回

十一

「なにかあったんですか」

その声にハツとして、森岡恭平きょうへいはスマートフォンから顔をあげた。訊ねてきたのは田島さんだ。彼女だけでなく、荒川さんと井上くんも心配げな顔で恭平を見つめていた。

今日は四月第二木曜、小学生三人はまだ春休みで、代官山だいかんやまにあるフィギュア事業部の見学の礼に訪ねてきたのだ。いまいるのは本社の事務室である。井上くんが買ったばかりのモデリングソフトを見つけたのをきっかけに、使い方を教わっていたところ、恭平のスマートフォンが震えた。

桜井桃枝ももえからのLINEで、〈これってマズくありませんか〉という文面にネットニュースが添付してあった。東南アジアの某国で

起きたクーデターを報せる記事なんて、ふだんであれば気にも止めないだろう。しかしその国には弟の慎次しんじが足繁く通って手に入れたフィギュア工場の建設予定地があったのだ。立地協定の調印式というところまで話が進んでいる。ボート好きの国王と兄貴がなかよくなれば、物事を優位に進められる、ぜひ調印式に出席してほしい、会社のためだと弟直々に頼まれ、恭平は承諾した。三日前に小学生三人を代官山へ連れていったときのことである。

小学生でも気づくくらい、表情が変わっていたのか、俺は。

「いや」恭平は無理矢理、笑顔をつくってみせた。うまくできたかどうかは自信がない。頬が少し震えていたのだ。「たいしたことじゃないんだ。でもちよっと急ぎの用でね」

「あたしたち、お暇いそしたほうがいいですか」田島さんが訊ねてくる。

「オイトマってなんだ」

「帰るって意味だよ」荒川くんの質問に井上くんが答え、椅子から立ちあがる。

「悪いね。できればもっとモデリングソフトについて、教わりたかったんだけどね」

「これ」田島さんが持参した紙袋を恭平に差し出す。「母の手作りクッキーです。会社のみなさんでお食べください」

「ありがとう。そうだ、これ」紙袋と交換に恭平はコンビニ袋を渡

した。中身は鈴カステラだ。お茶菓手にだすつもりで買っておいたのを、忘れていたのである。「三人で分けられるかな」

「これからウチで遊ぶので、おやつにいただきます」

田島さんがハキハキと答える。

「田島のママのクッキー、マジでウマいですよ」

荒川くんが最後にそう言い残し、三人は会社を去っていった。

慎次のスマートフォンは留守録だったので、「連絡をくれ」とLINEを送ったが、五分経っても未読のままだった。いてもたってもいられず事務室の電話で、代官山のオフィスにかけることにした。

「森岡人形フィギュア事業部です」

「社長の森岡だけど、部長はいるかな」

「あつ、社長、服部はつとです」フィニッシャー担当で、小学生三人の見学に付き添ってくれたゴスロリちゃんである。するとなぜだか彼女は声を潜めた。「いまこちらから電話しようと思っていたところなんです。ほんのいましがた部長から電話がありました。ご存じですか、フィギュア工場を建てる予定の国が」

「クーデターだろ。ネットのニュースで知った」

「あたしは部長に聞いたばかりなんです。ビックリですよね」

ほんとにビックリしているのだろうが、服部は香気のんきな口ぶりだっ

た。それが恭平を苛つかせ、思わず声を荒立ててしまう。

「弟はいまどこにいる？」

「わかりません。すみません」服部の口ぶりが変わる。「訊いておけばよかったですか」

「あ、うん。いや、いいんだ」恭平は少し冷静さを取り戻す。「それで弟は他になんて言ってた？」

「きみ達はなにも心配しないでいい、しばらくそっちにいけないけど、いつもどおり仕事をつづけてくれ、それとあと、なにかあったら社長に相談しろとも。実際は社長じゃなくて兄貴とおっしゃっていましたが」

「そっちの近くのマンションに暮らしているんだよな。その電話番号はわかるかな」

「イエデンはないはずですよ。いつかご本人がおっしゃっていました」  
「念のために訊いとくけど、弟はプライベートで親しくしてたひとはいるのかな。たとえばカノジョとか」

「いません」服部は即答だった。「じゃなければ婚活パーティーいかないでしょうし」

「アイツ、そういうのにいったのか」

「はい。それも頻繁に。ひとに誘われてとか取引先の付きあいだとか、なんだかんだと理由はつけていましたけどね。そのくせ当日は

やたら気合い入れた服を着てオフィスにあらわれて、一日落ち着きがないんです。夕方になると部長室の中を、意味もなくひとりでグルグル歩きまわっていました。それはまだイイんですが、パーティーの翌日は見ていられませんでした。たいがい満足な成果が得られないもんですから、すっかりしよげちやって、ソファに埋もれるように座ったまま、びくりとも動かないんです」

引きこもりだった頃の弟も、自分の部屋でそんなふうにしていたの思い出す。

「硝子張りだからぜんぶバレバレなんだな」  
ガラス

「そういった意味では隠し事のない上司ではあるんですけどね」

「恵比寿のクラブでDJをやってるんだろ。そういうところではどうなの？」

「ああ、あれ」服部の声が沈む。

「服部さんはいったことあるの？」

「一度だけあります」

「どうだった？」

「一度でじゅうぶんとしか言い様がありません」

恭平は次第に弟の慎次が気の毒になってきた。世界を股にかけて活躍しながら私生活はイマイチで、代官山のスタッフに疎んじられるとまでいかずとも、軽んじられているようだからだ。コミュニケ

ーション能力の低さは引きこもりで高校を中退した頃と、たいして変わってないのかもしれない。服部との話をおえて受話器を置くと、スマートフォンが震えた。LINEだ。弟かと思いきや、桜井桃枝だった。

〈ファイギア部長が電話にでません。LINEも未読のままです。社長のところにはなにか連絡ありましたか〉

〈私もおなじだ。いまファイギア事業部に問い合わせたら、むこうにはついさきほど電話があったそうだ。スタッフにはなにも心配しなくていい、しばらくそっちにいけないけど、いつもどおり仕事をづづけてくれ、なにかあれば社長に相談しろと言っていたらしい〉  
送信してすぐに既読になる。そして少し間があつてから、桜井のLINEが届く。

〈心配しなくていいって言われたら、却かえって心配じゃないですか〉  
心配だ。でも恭平は同意しなかった。

〈いまは弟を信じるしかない〉と打って送信した。これまたすぐ既読になったが、桜井の返事はなかった。

「そりやマズいですなあ」

経理部長の幸田こうだは呻うめくように言った。昼一に外回りから戻ってきた彼に、東南アジアの某国で起きたクーデターの件、そして慎次と

連絡が取れないことを話した。自分ひとりで抱えこんでいては、不安でたまらなかったのだ。幸田には嘘でもいいので慰めなぐさの声をかけてほしかったというのもある。ところが彼の口からでてきたのは、よりいっそう不安を煽あおる言葉だった。

「なにがマズい？」

「金ですよ、金」幸田は腕を組み、首を傾かしげた。その顔は見る見るうちに険しくなっていく。「慎次さんには社長に言わないようにと、口止めされていたのですが、こうなった以上、お話ししておいたほうがいいかもしれませんね」

そう言いながらも幸田はなかなか話を切りだそうとしなかった。まだ少し迷いがあるらしいのだ。

「弟には幸田さんから聞いたとは言わない。約束する」

「あの国と交渉をはじめて三年、そのあいだに、工場をつくらんがために、相当な額を投じていましてね。いわゆる接待費でして、相手は主にあの国の政府の高官なんですよ。はっきりした人数はわかりませんが、六、七人はいたでしょう。彼らに少しでも気に入られるために食事を奢おごるのは当たり前前、日本に家族揃おとって招待して、慎次さんがつきつきりで案内をしたことも、一度や二度ではないとかで」

よその国の家族を弟が案内している姿なんて、恭平にはいまいち

想像がつかなかった。ついさきほど服部に聞いた話からすれば、弟のコミュニケーション能力は昔と大差ないように思えたが、そうでもなさそうだ。もしかしたら仕事ではできても、プライベートでは無理だったのかもしれない。

だとしたらだ。桜井桃枝にフィギュア製作の協力をしてほしいと頼んだのは、仕事モードで彼女をくどくどとしたのではないか。まったくもってやれやれだ。パワハラだしセクハラでもある。本人にそのつもりはなくてもだ。

「会う度に高官の地位にあわせて、金を包んでいかなきゃならないともおっしゃっていました」幸田の話はなおもつづいていた。「代官山にいく度に、その手の話を聞かされ、経理の仕事よりもそちらのほうが時間を食ったくらいです。夕飯に誘われた日には大変でしたよ。夜の六時七時くらいにはじまって、二軒三軒とハシゴをしています。夜の六時七時くらいにはじまって、二軒三軒とハシゴをしています」

「でも弟の話だと、幸田さんはフィギュア事業部のスタッフを誘って、代官山界限へ呑みにいっているって」

「誘ってなんかいません」幸田はきっぱり言った。「誘われたんです。それもいままでに三回くらいで、最近の若い子はお酒を呑みませんから、私ひとりビールを二杯程度呑んでいただけです。慎次さん、そんなこと言ってたんですか。やんなっちゃうな。五代目、お疑い



になるんでしたら、代官山の子達に確認して頂いてもかまいませんよ」

「疑ってなんかないさ」恭平は宥めるように言い、話を元に戻すため、こう訊ねた。「慎次が相当な額を投じていたと言っていたけど、どれくらいなの？」

「億は軽く超えています」

「マジで？」

「マジです。でもこれは領収書があつて、なんとか経費として落とした、つまりは私が把握はあくできているだけの額です。はたして袖の下はどれだけ払っているのかは、はっきりしませんが、慎次さんの愚痴から推測するに、経費よりも多いようで」

「そんだけのお金、アイツはどうしたわけ？ 自腹じゃ無理だよね」

「私もそう思って、何度か慎次さんにお訊ねしたんですよ。すると雑誌の原稿料やフィギュアのイベントの出演料などで、やりくりしているとおっしゃるんですが、そんなものでは到底、追いつきっこありません。いくら酔っ払ってもそのへんのガードが硬くって、しまいには工場ができれば、いくらでも儲けられるので、細かいことは気にしないでくださいと言ひ張るばかりでした」

億を超える出費が細かいこととは言えまい。工場ができさえすれば、いままでの三倍の生産量となる計画だと、慎次が得意げに話し

ていたのを思いだす。

もちろんフィギュア事業部の売上げは三倍になるってわけさ、兄貴。

「でもこのまま工場の件がポシャったら、儲けるどころか、けつこ  
うな負債を抱えてしまうわけですからねえ」

幸田がため息まじりに言う。

三倍どころかマイナスになりかねないのか。

「やっぱマズいすなあ、こりゃあ」

東南アジアの某国で起きたクーデターについてはNHKをはじめ、  
キー局のニュースではほぼ流れなかった。取り上げられたとしても、  
桜の開花前線情報よりもずっと短い時間だった。新聞の記事は探さ  
ないと見つからないほど小さく、ネットの情報もごく僅か<sup>わず</sup>だった。

慎次とは連絡がつかないまま、日々が流れていった。そのあいだ  
にもトーキョーローカルサイキックのメインキャラを日本人形でつ  
くる計画は着々と進められていた。一応、言いだしっぺである恭平  
が、社長自ら陣頭指揮を取るカタチではあったものの、実質的なり  
ーダーは桜井桃枝だった。

フィギュア製作部のスタッフにも手伝ってもらいましょよ、と  
桜井が提案するので、恭平は服部にその旨を伝えた。そして服部を

含んだ五人が協力することになった。なんでも五人とも日本人形に興味を持ち、製作現場を見たいと自ら手を挙げたらしい。

実際、平均年齢が二十五歳という若い五人は、かねつき鐘撞市の本社を度々訪れた。桜井がこない日もだ。そして本来の打ちあわせのみならず、日本人形の作り方についても職人達に訊ねた。質問攻めといったほうが正しいくらいである。

最初のうちこそ、その若さと勢いにけお気圧され、面食らっていた年配の職人達も、次第に慣れてくると、丁寧かつ真剣に教えられるようになり、五人に作業をさせることも多くなっていった。

さらには若い五人にパソコンの使い方を教わってもいた。主にモデリングソフトについてだ。ときにはそこに学校帰りに立ち寄る小学生三人組が加わり、本社が大賑わいになる日もあった。恭平は自分が子どもの頃の会社を思い出した。職人やパートがもつと大勢いで、毎日がお祭りとまではいかなくとも活気づいていたのだ。

そんな中で頭師三人、宮沢と峰、そして溝口が描いたおびなめびな男雛女雛から来年の新作を選ぶという企画も順調に進んでいた。

これ、3Dにしましょうか。そのほうが具体的でわかりやすくなりますし。

そう言ったのは代官山からきた五人のうちのひとりだ。その場には桜井もいて、どの男雛女雛がいいか、訊ねているところだったの

だ。ならばと恭平がお願いすると、中一日で仕上げてきた。そして本社に朝から訪れ、二階の職場でノートパソコンを広げ、頭師ひとりとずつから意見を聞き、調整を加えていった。いちばん長くてしつこかったのは宮沢だ。なんだかんだで彼だけで二時間以上かかっていたが、スタッフの子は嫌な顔ひとつせず、ニコニコ笑いながら直していた。それだけではない。頬の色が赤過ぎますよとか、この目の大きさだとバランスが悪くないですかとか、だったら2パターンお見せしますからどちらがいいか判断してくださいとか、宮沢に提案することもしばしばあった。

そばで聞いていて、宮沢が痲癩かんしやくを起こすのではないかと恭平はヒヤヒヤした。ところが案に相違して、五十歳も年下であるスタッフの子の話に宮沢は真顔で耳を傾け、それはちがうと反論もするが、素直に聞き入れもした。おまえさん、わかっているじゃねえか、と褒めそやすこともあった。

かくして完成した男雛女雛の3Dモデルは四月のなかばに森岡人形のホームページにて、360度回転可能で、公開された。

さらにゴールデンウィークいっぱい、鐘撞駅前の商店街および郊外にあるショッピングモールでもチラシを配布することになった。これは良隆よしたかのおかげである。本人の言葉どおり、地元の人関係をつるに活用したらしい。恭平もいくつか同行したのだが、たしかに

交渉相手が中学や高校の同窓生ばかりだった。ボートではない別の競技で、恭平とおなじ年にインターハイに出場したひとや、ウチの高校の女子の半分が、あなた目当てで県大会へ応援にいきましたよ、と笑うひともいた。

ネットとリアルいずれでも、どの男雛女雛が好みかを投票してもらおう。ゴールデンウィーク最終日がメ切で、明けてすぐに集計し、来年の新作が決定する流れだ。

なんやかんやで毎日、やらねばならないことが多い。それでも合間を見ては、代官山の賃貸マンションを訪ねた。だが弟は留守のままだった。

東南アジアの某国で起きたクーデターは血を流すこともなく、成功を収めていた。旧政権の高官のほとんどは海外に逃げだし、ボート好きの国王は、若い頃の留学先だったイギリスに亡命してしまっただという。

はたしてフィギア工場の建設予定地はどうなってしまったのか。某国の大使館が渋谷にあった。ネットで検索して見つけたのだ。

恭平は試しに電話をかけてみたが、留守録にさえなっておらず、呼び出し音がひたすらなりつづけるだけだった。

父が働いている。

森岡恭平の父、森岡人形の四代目だ。本社二階の工房、フロアに入っただけ右にある窓際の作業机で、人形の頭に顔を描いているのだ。真剣なまなざしで、筆を動かしているあいだは息を止めている。神経を集中するにつれ、自然とそうなってしまうらしい。そのうえ身体ぜんたいから漂わす独特な雰囲気<sup>はばか</sup>のせいで、声をかけるどころか、近づくのも憚<sup>はばか</sup>られるほどだった。これは夢だと恭平は気づいた。なにしろ父は十年も昔に亡くなっているのだ。それでも父が働く姿をじっと見つめてしまう。とくにその手先に目をむける。人形に命を吹きこむ瞬間だ。

父の死は突然だった。

大学に入ってすぐに一人暮らしをはじめて、実家にはよりつかなくなつた。盆と正月も帰らなかつたときのほうが多い。おかげで父と最後に話したのはいつだったか、思いだせないくらいだ。結婚前に熱海<sup>あたま</sup>の芸者を連れて帰省したときも、満足に会話を交わした覚えがない。

父はなにを考えていたのだろう。

人形職人の面々にパートのオバサン達、経理部長の幸田といった社内の人間だけでなく、鐘撞人形共同組合や取引先の人形店などからも、父の話聞くことがある。でもそれは父がどれだけ頭師として腕がよかつたとか、人づきあい<sup>うま</sup>は上手とは言えないが誠実な人柄

だったとか、うわべの話ばかりだった。それはおなじ二階の工房で働き、もつとも間近で、いちばん長く共にいた頭師の宮沢もそうなのだ。もしかしたら父は本心をだれにも語らず、胸にしまっていたのではないか。そのとき背後にひとの気配を感じた。

お父さん。

溝口真純ますみの声だ。ところが振りむいても姿がない。妙に思いながらもふたたび前をむくと、なんと溝口は父に話しかけていた。父の手にある頭を指差して、なにやら質問しているのだ。声は聞こえるものの、その内容まではわからない。父が答えている。にこやかな笑みを浮かべながらだ。そんな父の笑顔を恭平は見たことがない。あつたとしてもずっと昔、物心がつく前だろう。

親父の邪魔をするな。

気づけば恭平がそう口にしてしまったところ、溝口が言い返してきた。

なによ。兄さんなんて、お父さんの気持ちかわからないくせして。

なんだとっ。

恭平はカツとなった。と同時に溝口が父をお父さん、自分を兄さんと呼ぶのも気になる。彼女はやはり、父の隠し子だったのか。

慎次兄さんもそうよ。ふたり揃って、いつまでお父さんに迷惑をかけるつもり？

溝口がなおも言う。すると父の身体がぐらりと揺れ、床へ崩れ落ちちていく。

親父っ。

倒れた父を抱きかかえた。父がなにか言ったが聞こえない。その口に恭平は右耳を寄せる。息も絶え絶えに、父はこう言った。

慎次はどこだ。どこへいった？

いま捜しているよ。心配ない。

恭平は自宅のガレージで、ローイングマシンを漕いでいた。今朝は五時半に目覚めてしまった。もう一眠りするために布団をはずにいたが駄目だった。目が冴えて寝付けなかったのだ。夢の中で、弟の行方を亡くなった父に訊かれたからかもしれない。

結局、六時十五分に家をでて、ジョギングをすることにした。疲れて仕事に支障はでないかと思ったものの、我慢できないくらい、無性に身体を動かしたくてたまらなかったのだ。

曳ひきぬき抜川がわまでいき、土手道を走っていたところ、鐘撞高校ボート部の面々とばったり出会であった。朝練前のランニング中だったのだ。去年の秋から後輩達の練習に顔をだすようになり、いまでは熊谷良隆くまがいとふたりで、土日のいずれかはコーチをしている。

二・三年生で男子五人だけだったが、この四月に新入部員が七



人も加わった。そのうち四人は女子だったので一気に華やいだ。彼女達は未経験者にもかかわらず、なかなか筋がよかった。そこで恭平はふたりずつ組にして、ダブルスカルの練習をさせたところ、二週間もしないうちに、なかなかのタイムを叩きだした。すると他の部員達の士気が上がり、とくに先輩達五人の舵手だしゅつきクオドルブルも好タイムがでるようになった。夏の県大会に期待がかけられ、インターハイも夢ではないかもしれないくらいだ。

イツテエエアリテイチニンナシツ、イツテエエアリテイチニンナシツと掛け声をかけながら、後輩達に加わって、八キロほど走ってしまった。それから家に戻り、自宅のガレージに直行した。疲れてはいたものの、まだまだ身体を動かしたくて、日課のローイングマシンをはじめたのだ。

これって現実逃避かもしれないな。

そう思わないでもない。でもやらずにはいられないのだ。

東南アジアの某国でクーデターが起きて三週間が経つ。弟の消息は不明のままだった。この事実を知っているのは社内ではフィギュア事業部の服部、経理部長の幸田、そして恭平の三人、そして社外では桜井ひとりだけである。

じつは先週の月曜、代官山のマンションへ確認しにいった帰り、渋谷警察署まで足を伸ばし、行方不明の届け出をしてきた。だから

といって警察が捜してくれるはずがない。だがしないよりはマシだ  
と思っただのだ。

慎次はどこだ。どこへいった？

夢の中で父が言った言葉が頭の中でリフレインする。すると背後  
にひとの気配を感じた。今朝見た夢では、溝口の声が聞こえてきた。  
手を止めて振り返ると、そこにいたのは服部だった。

「すみません、驚かしちゃいました？ 声をかけようと思ったんで  
すけど、タイミングを逃してしまっただ」

「いや、だいじょうぶだ」

黒を基調としたフリフリドレス、いわゆるゴスロリファッション  
で、服部は立ちはだかっていた。代官山のオフィスで見たときは、  
こういうひともいるよなと思っただけだが、見慣れた自宅の敷地  
内にあらわれると違和感が半端ではない。今朝見た夢より夢みたい  
だ。それだけ現実味が無いと言っている。

「会社の鍵が開いてなくて、それであの、ご自宅のほうに伺おう  
としたら、こちらのガレージから音が聞こえてきたもので」

「いま何時？」

「八時半になります」約束の時間だった。本来ならば十五分ほど前  
にはトレーニングを切りあげ、自宅で軽くシャワーを浴びて着替え  
る予定だったのだ。

「申し訳ない」慌てて立ちあがり、ローイングマシンを片付ける。  
「きみ以外の四人は？」

「八時に駅前に集合して、ここまで歩いてきてるんで、全員揃っています」

「そっか。悪かったな。あと五分待つてくれないか」

シャワーは無理でも着替えたほうがいい。Tシャツに七分丈のパンツで、汗だくではさすがにまずい。

「それ、部長もときどきやっていました」

ローイングマシンを見ながら服部が言った。部長とはもちろんフィギュア事業部部長の慎次だろう。

「私が代官山にいったときもやってたな」

弟のローイングマシンは最新型で、十五万円以上する代物しろものだった。「ひとが訪ねてくる直前からはじめて、さもずっとやってたかのようなフリをするんです。マジ笑っちゃいますよ。代官山のスタッフは硝子越しでみんな見てるんで知ってます。あつ、でも社長もそうだって言ってるわけじゃないですよ。そんな汗だくで、身体もがっちり鍛えあがっていますし」服部が慌ててフォローするので、恭平は思わず笑ってしまう。「それにはボートの大会に、参加なさるんですもんね」

六月に開催される関東マスターズレガッタに、熊谷良隆とダブル

スカルで参加するのだ。

「だれに聞いたの？」「熊谷さんです」

「息子のほうだよね」「そうです」

「いつ？」「先週末、今日の打ちあわせで代官山にいらして、あたし達五人にランチ奢ってくださいだったんです。そのときに」

良隆が奢ったのではない。彼はそのランチの領収書を提出していたのだが、本人を含めた六人分で二万五千円だか六千円で、経理部長の幸田は怒り心頭だった。それはそうだ。社内の会合でひとり四千円ものランチ代なんか認められるはずがない。良隆としては思ってたよりも早く、代官山のスタッフとお近づきになれたので、調子に乗っていたのだろう。幸田がこんこんと説教をしているところを恭平が口を挟み、今回だけは大目に見ることにしてあげたのだ。

「社長とはおなじ高校のボート部の先輩後輩で、インターハイに出場して優勝したってことも、おっしゃっていました。去年の秋口に熊谷さんが誘って、ふたたびボートを漕ぐようになって、六月の大会に参加することになったんですよ」

若いスタッフに囲まれ、嬉々としてしゃべる良隆の姿が容易に想像できた。

「これで兄貴みたいになれる」

「え？」

「ってローイングマシンが届いたときに、部長が言ってたんです。なんのことかと思ってましたけど、ようやく合点がきました。でも、だったらもつとちゃんと練習すればいいのに」

「そうだな」

「ですよね」と頷いたあとだ。「部長から連絡ありました？」

「いや。そっちはどう？」

「ありません。ひと月くらいの音信不通はザラなんで、ほとんどだれも気にしてませんけどね。でもこういうときでも部長は雑誌の連載を編集部へ送っていましたし、取引先との交渉はメールでやりとりしていたのに」

「そういうのもないわけだ」

「はい。なのであちこちに詫<sup>わ</sup>びて、あれこれ先延ばしにしてもらっている状態です。ゴールデンウィークが明けても行方がわからなかったら、けっこうピンチでして、どうしたらいいものか」

服部が困り顔だ。本気で助けを求めているのだ。

「明日、代官山に行くよ。力になれるかどうかかわからないが、ゴールデンウィーク前に、対策を練っておいたほうがいいだろ」

「助かります」服部は深々とお辞儀をする。「よろしくお願いします」

ひととおり話が済んだので、恭平はガレージをでていこうとした。しかし頭をあげた服部は、その場を動こうとしない。またなにか話

し足りない顔つきで、恭平を見ているのだ。

「どうかした？」と訊ねるしかない。

「ひとつお訊ねしたいことがあります。あたし個人というよりも  
フィギュア事業部のスタッフを代表してなのですが」

「怖いな。どんなこと？」スタッフを代表して、となると穏やかで  
はない。

「以前、部長にプライベートで親しくしているひとがいるかどうか、  
お訊ねになりましたよね。社長はいらっしゃるんですか」

なんだ、そんなことか。身構えてしまった自分が、恭平はひどく  
間抜けに思えてくる。

「いないよ」苦笑しながら答える。「十年前に離婚してからずっと独  
り身だ」

「どうしてです？」

「離婚の原因？」

「いえ、独り身のほうです」

元妻の浮気現場を目の当たりにしたせいで、男性のモノが不全に  
なり、いまもそのままなんだよとは口が裂けても言えない。

「こう見えても社長の仕事は忙しいんでね。出逢うチャンスもない  
んだ」

「だったら部長のように婚活パーティーにでも参加なさればいいの

に」

「兄弟揃っていくのも変だろ」

「揃っていかなくてもいいんですよ。部長はさっぱりでしたけど、社長だったらすぐにイイ相手が見つかるんじゃないですか」

「そうはウマくないさ」

相手が見つかったところで、男としての機能が使えなければ意味がない。

「でも高校時代の社長はモテモテだったって」

「それも良隆、いや、熊谷に？」

「はい。ボート部の練習を見るために、他校からも女の子が押し寄せてきたって」

「二十年近くも昔の話だよ」

「今度のボート大会は必ず応援いきます」

服部に勢い込んで言われ、恭平はいささかたじろいだ。

「熊谷に誘われたのかい」

「それはそうですけど、でもみんなは社長を応援したいって言うてます」

「熊谷とふたりでボートを漕ぐんだ、私だけ応援しても意味がない」

「それはそうですけど」

「服部さあん、社長、いたあ？」

会社のほうから呼びかける声が聞こえてきた。

「はあい、いらっしやいましたあ。いま、そっちにいきませす」服部はガレージをでて返事をする、恭平に顔をむけた。「すみません、長々とお話しちやって。それではあの、今日はよろしくお願ひしませす」

「こちらこそよろしく頼むよ」

狭くて急な階段をのぼっていく。作業がはじまる前に、父の作業机を拜んでおこうと思ったのだ。代官山のスタッフは一階の玄関口でたむろって、職人達がくるのを待っている。

ところがだれもいないと思った二階に、ひとがいた。しかも目を閉じて、父の作業机に手をあわせている。溝口だ。気配で気づいたらしい。瞼を開き、まぶた恭平のほうをむいた。

「おはようございます」

「なにしてたの？」

「今日も一日いい仕事ができますようにって、先代にお願いしてたんです。社長さんも毎日なさってますよね」

「うん、まあ」と頷いてからだ。「きみは生前の親父にどこかで会ったことがあるのかい」

俺はなにを訊いているのだ。



「どうしたんです、藪やぶから棒に」

「いや」朝見た夢が頭の片隅に残っていたのだと、恭平は気づいた。でもそれを口で説明するのは、なんだか気恥ずかしかった。「ふと思いついただけで」深い意味はないと言いかけ、恭平は咳払いをしてごまかす。

溝口真純が父の隠し子ではないかと言いだしたのは、宮沢である。根拠は薄い。父の十八番を鼻歌で唄っていたとか、父がつくったのとそっくりな雛人形がつかれるとか、その程度なのだ。

まだあるにはある。父に弟子入りした美大生の下宿先から父がでてきたところに宮沢は出会しているのだ。その場で父に口止めをさせられたらしい。そしてその美大生が一身上の都合で森岡人形をやめた半年後に溝口が生まれている。これがただの偶然だと坊ちゃんはおっしゃいますかとも宮沢は言うのだが、どう考えても恭平には偶然としか思えなかった。父とその美大生のあいだに、なにかしらの関係があった可能性はある。だからといって子どもがいたとは限らないではないか。そもそも溝口には両親がいるのだ。だがそれも宮沢は、引き取られたにちがいないと言い張るばかりだった。

ところがもうひとり、溝口を父の隠し子だと疑う人物がいた。弟の慎次である。先月末、電話口で弟は恭平に溝口が自分達の妹なのかと、訊ねてきたのだ。会ったときに話を聞かせてくれと言われた。

しかし先日、代官山へいったときには、ついぞその話ではないままで、弟は行方知れずになってしまったのだ。

溝口さんが親父の娘かもしれないってこと、俺以外にだれかに話しました？ たとえば慎次とかに？

つい先日、宮沢に訊ねたところだ。とんでもありませんと彼は首を横に振った。ではいったいだれが慎次にこの話を吹き込んだのか。

「会いたかったですけどねえ」

「どうしてそう思う？」じつの父親だったから？

「四代目がおつくりになった雛人形を完コピしたとき、どうやってつくるかはネットで検索したり、図書館で調べたり、ひとに訊いたりすれば、だいたい見当がついたので、どうにかこうにかカタチにできたんですけど」

「どうにかこうにかだなんて、寸分違わず親父の雛人形そっくりそのままだったよ。見事なものさ。ここだけの話、宮沢さんや峰さんだって、あそこまでは無理だ」

「ありがとうございます」溝口は礼を言いながらも、弱々しく笑った。「たしかに素材や技法はわかってカタチにできました。でも最後までわからなかったことがあったんです」

「なにがわからなかったのか、教えてくれないか。俺が無理でも職人のだれかしらはわかるかもしれないだろ」

「気持ちです」

恭平はなにも言えなかった。あまりに予想外の答えだったからだ。

「自分の雛人形が欲しかったのはたしかです。でもほんとはこの雛人形をつくったひとは、どんな気持ちだったのか知りたくて完コピしてみたいんです。でも最後までわかりませんでした。四代目にお会いして、直接聞きたかったんですけどね。亡くなったのを知ったのは、フィギュア事業部でバイトをはじめたあとなんですよ。ほんと残念でなりません」

なによ。兄さんなんて、お父さんの気持ちが変わらないくせして。

今朝の夢で、溝口にそう言われたのを思い出す。どうやらあれは正夢だったらしい。

どかどかと足音が聞こえてきた。だれかが階段をのぼってきたのだ。ひとりふたりではない。

「おはようございます、五代目」

先頭を切って入ってきたのは宮沢だった。その背後から代官山のスタッフがぞろぞろあらわれた。

「いまいち子どもっぽくない？」「ツインテールだからそう見えるんじゃないね？」「目が小さ過ぎるのかなあ」「顎の先をもっと尖らせてみたら？」

自分の席に座る宮沢のまわりを代官山のスタッフと本社の職人達  
が取り囲んでいた。恭平もその輪の中にいる。

宮沢の机の上のノートパソコンの画面にはトーキョーローカルサ  
イキックのメインキャラがいた。アメコミの原作を元に桜井が描い  
たイラストを、フィギュア事業部のひとりが、ひとまず顔のみを3  
Dにしてきたのである。宮沢の右隣にいる男の子がそうだ。頭師三  
人の男雛女雛を3Dにしたのも彼だった。今回のメンバーではいち  
ばんの年下で、入社二年目で十八歳のはずだが、細身で小さいため  
に十五歳前後にしか見えない。しかも愛らしい顔なので、女の子の  
ようでもあった。

「うっさいなあ、みんな。意見をどうぞとは言ったけど、いっぺん  
に言ったら、わけわかんないじゃん」

十八歳の少年の拗ねた口ぶりに、みんながどつと笑う。恭平も笑  
ってしまった。

「だったらあんたが指名して、ひとりずつ意見を訊いてったら？」

これは服部だ。

「宮沢さんはどうですか？ この顔」早速、少年はお伺いを立てるよ  
うに言った。

「頬骨をちよつと凹ませられないかな。いまできるかい？」

「いいですよ」

そのとき階段をだれかが駆け上がってきた。経理部長の幸田だ。他のみんなは彼に気づいたものの、パソコンの画面から目を離そうとはしなかった。

「五代目っ」恭平のそばまで近づくと、幸田が声を押し殺して言った。「慎次さんのことで問題が」

〈つづく〉